

立方体透視図模写課題における輪郭を構成しない  
線分の延長に関連する要因について

医療法人社団 敬仁会 桔梗ヶ原病院  
言語聴覚士 龍田 栞

【背景】認知機能障害の存在を鋭敏に検出する課題として立方体透視図模写課題が広く臨床で用いられている。その誤り方から、これまでいくつかの採点方法が報告されている。しかし、アルツハイマー病 (Alzheimer's disease ; AD) 患者においては輪郭を構成しない内部の線分が延長する誤り (Extension of internal line segment : EILS) を呈することがあるものの、ほとんど注目されていない。

【目的】AD 患者における EILS の出現に関係する要因を検討する。

【対象】新潟リハビリテーション病院神経内科 (物忘れ外来) を初診し、AD と臨床診断された患者 232 例を対象とした。

【方法】MMSE 日本語版, ADAS 日本版の立方体透視図模写課題において EILS が認められた患者を EILS 陽性とした。②EILS の有無を従属変数とし、患者属性、疾患属性、認知機能属性のいずれかを独立変数とする logistic 単回帰分析を行った。

【結果】logistic 単回帰分析では初診時年齢、教育年数、数唱 (順唱、逆唱) の達成桁数、MMSE 得点、ADAS の合計減点、観念行為、見当識、ROCFT 模写課題の得点、FAB 合計得点に有意なオッズ比が得られた。MMSE 得点を共変数とし、logistic 単回帰分析で有意差を認めた項目のいずれかを独立変数とする logistic 重回帰分析を追加で施行した結果、教育年数、数唱の順唱、ROCFT の模写課題の得点で有意なオッズ比が得られた。

【結論】AD 患者における EILS の出現には認知機能の全般的重症度、教育年数、注意障害が強く関連する一方で、立体視や遂行機能との関連は弱い可能性が示唆された。

キーワード：

アルツハイマー病 (Alzheimer's disease: AD), 立方体透視図模写課題, 構成障害,  
注意障害, 遂行機能障害